

# <場>の「用の美」—<sup>ろうしょうば</sup>老松場古墳群と長野県立美術館から バーナード・マラマッド「夏の読書」とニューヨーク公共図書館、 ハイラインへ

宮本 文

## 1. はじめに

2021年10月29日、人文科学研究所2021年度第1回総合研究調査旅行に参加するために新宿8:00発のあずさ5号に乗った。県境を越えたのは2020年3月に前任校から引越して来て以来のことである。COVID-19の流行で2020年4月に専修大学に着任して以来ほぼ同僚の誰も会わずに1年半過ぎた頃、長野への調査旅行に声をかけてもらった。細部まで行き届いている旅程表をもらってはいたが、最終的にどこで集合するのか聞きそびれてしまった。旅慣れた雰囲気なのか「塩尻駅ですか？」と尋ねるのもやぼな気がしたので、少し緊張しながらも山梨県を經由して長野に入るルートを楽しむことにした。

筆者は以前、群馬に勤めていたので、群馬ルートで長野と往来することが多かった。いまでは新幹線はもとより、<sup>うすい</sup>碓氷バイパスを使えば、ほんの少し足を伸ばす感覚で行くことができる。が、碓氷峠経由で群馬と長野を車で往来すると、その昔世界史で習った「自然国境説」という言葉が血肉を持って立ち上がってくる。碓氷峠は群馬県安中市松井田町と長野県北佐久郡軽井沢町との境にある国道18号の旧道であり、全長約11キロの区間に184のヘアピンカーブが矢継ぎ早に続く片峠の道である。現在では碓氷バイパスができたこともあり、圧倒的に交通量が少なくなったが、運転の腕に覚えあるものたちが今でも碓氷峠を好むのだろうか。「群馬文学史」というものがあるとすると、サブジャンルの台頭が文学史やアカデミズムで著しくなったポストモダン以降の群馬文学の代表作といえるのがしげの秀一(1958-)の漫画<sup>イニシャル</sup>『頭文字D』(1995-2013)である。そこに出てくる峠の走り屋たちの主戦場の一つがこの碓氷峠である。碓氷峠の九十九折りは他の群馬の峠とともに現代の大衆文化<sup>ポップカルチャー</sup>『頭文字D』のなかで車好き文化をはじめとした群馬の風俗を刻みこむ<場>となっているのである。

笹沢佐保(1930-2002)が生んだ「群馬のアンチ・ヒーロー」である木枯し紋次郎(小説『木枯し紋次郎』(1971-95)の主人公)にも触れておきたい。「あっしにゃあ関わりのねえこって…」<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 『木枯し紋次郎』は1972年のテレビドラマから度々、ドラマ化・映画化されてきた。この文句は1972年の劇中のもので、一般には「あっしには関わりのないことでござんす」として流布し、流行語になった過程がWikipediaの「木枯し紋次郎」の項目で説明されている。小説中では、5作目「水神祭に死を呼んだ」で紋次郎は「あっしは面倒なことに、関わりを持ちたくねえんでござんす」と初めて口にする。

というフレーズでお馴染みの渡世人・木枯紋次郎も、例えば小説の一節に「箱根山より嶮岨と言われる碓氷峠だが、下りとなるとそれほど難儀ではない」(「流れ舟は帰らず」)とあるように、渡世の最中にここ碓氷峠をたびたび往来する。市川崑監督・中村敦夫主演の1972年版ドラマのオープニング・ナレーションでは「上州新田郡三日月村の貧しい農家に生まれたという。十歳の時に故郷を捨てその後、一家は離散したと伝えられる。天涯孤独な紋次郎。なぜ無宿渡世の世界に入ったは定かではない<sup>2</sup>と語られる(「木枯し紋次郎(第1期)」)。紋次郎登場の最初の短編「赦免花は散った」(1971)では、度重なる飢饉の時代、紋次郎は貧農の6番目の子として、生まれる前から口減らしされると決まっていたが、一番上の姉が生まれたての紋次郎を救う。その姉が紋次郎10歳の時に死んだことにより、彼が出奔することが書かれている。同作品には天保6年(1835年)に紋次郎は30歳との記述があるので、もう一人の實在の「群馬のアンチ・ヒーロー」国定忠治(1810-51)とほぼ同時代を描いていると言える。「赤城の山も今宵限りか」の文句で有名な實在の博徒である国定忠治は、上野国(群馬県)佐位郡国定村の旧家の長男に生まれ、19歳の頃から博徒となり、最期は賭場荒らしや関所破りの罪で磔にされた。その関所は<sup>おおど</sup>大戸の<sup>あがつま</sup>関所(現在の吾妻郡東吾妻町大戸)であり、忠治はその関所を<sup>しなのくに</sup>破り信濃国(長野県)へ逃亡した。「今日、映画、講談、浪曲などで描かれる忠治像は民衆の味方のように扱われているが、それらはいずれも虚構である」(藤野)とされている。検証された実像よりも庶民が心よせる伝承の方が「共同体の物語」としての強度が強いことは枚挙にいとまがない。紋次郎、忠治、『頭文字D』と下って行くと「社会から逸脱した<反>共同体の物語」の系譜が見えてくる。

話が長野から外れてしまったが、本研究調査旅行では「記憶の断絶と継承およびその記述をめぐる問題」というテーマを設定した長野への旅であった。社会からの逸脱・疎外を基調としながらも、日常生活とは異なる形であっても(あるいはそうであるからこそ)<場>に「あたらしいつながり」—神話といったものから新しい「想像の共同体」といったものまで—を生み出す可能性を示唆するこれら新旧の物語から始めてみたかった。

本稿では研究調査旅行の中でも特に二つの<場>、<sup>ろうしようば</sup>老松場古墳群と2021年4月10日にリニューアルされた長野県立美術館に焦点を当てて、共同体の「記憶の断絶と継承およびその記述をめぐる問題」という視点から<場>の「用の美」を考察する。「用の美」は日本の民藝運動の主導者である柳宗悦(1889-1961)の唱えた美学であり、民衆が日常の暮らしの中で用いるもの／ことに「美」を見出す考え方である。日々の暮らしの中で使うことと「美」を結びつけたこの言葉を援用することによって、<場>に人を巻き込むこと・巻き込まれることによって共同体が再構築・再解釈されていく様を、やや力技ではあるが長野からアメリカ・ニューヨーク

<sup>2</sup> 1972年版のドラマの「放映当時のオープニングのナレーションより」(「木枯し紋次郎(第1期)」)

につなげて考えてみたい。

長野編では、老松場古墳群で記憶の断絶と回復に立ち会い、その後、リニューアルした長野県立美術館が「あたらしいつながり」をどう生み出していくのか、長野という〈場〉をどのように継承・記述していくのか、そのねらいと仕掛けを見ていく。それらを出発点として、筆者が専門とするアメリカ文学におけるアメリカ・ニューヨーク編に接合するつもりである。アメリカ・ニューヨーク編では、まずユダヤ系アメリカ人作家バーナード・マラマッド (Bernard Malamud, 1914-86) の短編「夏の読書」(“A Summer’s Reading,” 1956) における共同体に対する疎外感と共同体にアクセスしていく過程を、短編に表象された「公園」と「図書館」に見出ししていく。併せて、実際のニューヨーク市にある図書館と公園による共同体の再構成・再解釈の実践・奮闘として、フレデリック・ワイズマン監督 (Frederick Wiseman, 1930- ) のドキュメンタリー映画『ニューヨーク公共図書館—エクス・リブリス』(*Ex Libris: The New York Public Library*, 2017) と、貨物列車の高架橋をリノベーションした公園ハイライン (The High Line, 2009年開園) に触れたい。

長野とアメリカ、古墳とパブリックスペース、歴史と芸術、フィクションとノンフィクションを並置するアクロバティックな試みではあるが、現在進行形で発掘・測量調査が行われている老松場古墳群を除いて、そこに通底しているのは、経済的あるいは言語・文化的 (新参者か否か) に、(そこにはとりわけアメリカの場合には人種・階級・ジェンダーの問題が前景化されてくるのだが) 公共財やインフラへアクセスしにくい疎外された人々を共同体に引き入れ、その共同体を形成・変容させる主体としてエンパワーしようとする理念や奮闘ではないだろうか。共同体のメンバーシップの枠組みを揺らがし、共同体を再生・再解釈をしていく。〈場〉に人を引き入れることによって補完されるような〈場〉の「用の美」をそこに見出し、「あたらしいつながり」を見出し続けられるという未完の一すなわち可能性の一夢を抱く。本稿はそのような〈場〉のあり方をゆるやかに示す試みである。

## 2. 長野編

### 2.1 老松場古墳群—共同体の記憶の断絶と回復

まずは本研究調査旅行の旅程を簡潔に記す。今回は、産業遺産である大王わさび農場と長野県立美術館を除いては、ほぼ歴史的な遺跡・古墳やそれらにまつわる博物館に赴いた。10月29日に長野県塩尻駅からバスと徒歩にて平出遺跡、奈良井宿、老松場古墳群、高遠城歴史博物館をめぐり、翌30日もバスと徒歩にて大王わさび農場、森將軍塚古墳館、長野県歴史館、長野県立美術館、そして最後に善光寺を参拝し長野駅から新幹線で帰途についた。その中でも最も印

象的であり、「記憶の断絶と継承およびその記述をめぐる問題」というテーマを現在進行形のいわば生の形で体験したのが老松場古墳群への訪問であった。

主に発掘・測量調査を行なっている関西大学文学部考古学研究室によれば、

老松場（ろうしょうば）古墳群は、長野県伊那市東春近中組に所在する古墳群です。『伊那市史』によると、古墳群は7基の古墳からなり、6世紀半ばから8世紀初頭頃にかけて営まれたとされています。…今年度〔2021年度〕以降の調査では、1・7号墳の詳細な墳形や規模、構造を確認するために発掘調査を行うとともに、残り3基（4・5・6号墳）の正確な墳形及び規模を確認するための測量調査も行う予定です。（ARIKU）

とあり、まさに現在進行形で再発見されている古墳群である。

実際に、バスの運転手やバスガイドの方も今まで案内したことがなかったそうである。分け入った場所にあるのでひとまず近隣でバスを降りて、バスガイドさんを先頭に田畑のあいだを歩いた。が、正確な場所がわからずに迷っている最中に学校帰りの小学生に遭遇して道を教えてもらった<sup>3</sup>。

未舗装の道を分入りながら辿り着いた古墳群は、正直に言えば素人にはこれが古墳と言われなければまったく気づかないものであった。高い木立に囲まれて、地元の人しか知らない散歩

道か、もしくは子供たちが走り回っていれば簡単なアスレチック・パークとも見えなくもない、とても静かな場所である。丘とも言えないほどのわずかに盛り上がった小さな場所は、ところどころに被せてあるブルーシートによって、かろうじてここが古墳群であることが示されていた。「記憶の断絶と継承およびその記述をめぐる問題」がまさに立ち上がっている瞬間に遭遇したと思わされる稀有な体験だった。別の言い方をすれば、文学研究の立場から考えてきたそれらの問題は、常に何らかレディメイドなものを批評・解釈し、何かを挟んだ形で見ていたのではないかと思わされる体験であった。そのこと自体は正しさの問題ではなく、ただ意識するか否かの問題



老松場古墳群（宮本撮影）

<sup>3</sup> 実際にこの古墳の測量調査には東春近小学校の生徒たちの活躍があったそうである（ARIKU）。

ではあるのだが、この意識がもたらす差は大きいと思う。

これから老松場古墳群がどのようにその断絶を回復し、継承され、記述されていくのか注視するところであるが、この体験は改めてアメリカのプリマス植民地の「再発見」を思い出させる。1620年、ピルグリム・ファーザーズたちを乗せたメイフラワー号がプリマスに上陸する。この「プリマス上陸」という神話は、白人中心主義の見方にあらゆる側面から意義を唱える1990年代あたりから激化した文化戦争を経由した現在でもなお、アメリカ合衆国の国づくりの神話として強力に機能している。だが、当初からプリマス植民地に国家のアイデンティティの拠り所とされるような神話が仮託されたわけではない。イギリスとの独立戦争、西部への拡張を伴う数々の戦争、南北戦争における国家分裂の危機の過程で、次第と国民国家としてのアメリカ合衆国のアイデンティティを強化する物語として再発見・再解釈されるようになり、現在のよような「プリマス上陸」が神話となった。そうしてプリマス植民地はアメリカの起源として多くの人が訪れる観光地になったのである<sup>4</sup>。2006年からNHKで放送されている北米紀行ドキュメンタリー『アメリカ・魂のふるさと』の「プリマス」編では、忘れ去られていたプリマス植民地が、当時の共同体として「忠実」に再現されている様子が映し出されている。そこには当時の衣装を着て生活する「入植者」や「ネイティブ・アメリカン」の人々までおり、「プリマス上陸」の神話がエンターテインメントとして（同時に切実さをもって）、再演されているように見える。

老松場古墳群がどのように継承・記述されていくのかこれからも興味を引くところであるが、その共同体の記憶の回復・継承・記述、あるいは再構築といった方法はもちろんここで引用したプリマス植民地のそれに限らない。むしろ、新しい方法が常に模索されているのだ。たとえば、今回の事前レクチャーも兼ねて行われた島津の報告において分析された日本のミュージアム<sup>5</sup>における空間のとらえ方・作り方の変遷一つとっても、その理念や実践の違い（あるいは発展とも呼ぶべきか）で共同体をめぐる諸相の解釈が変わってくるのがわかる。

## 2.2 長野県立美術館—「あたらしいつながり」の創出

ミュージアムの空間をめぐる変遷の歴史についてはここでは深入りせずに、長野県立美術館の空間設計を中心に「つながる美術館」というコンセプトに注目したい。

長野県立美術館の前身である長野県信濃美術館は1966年に開館した県立唯一の美術館で、善光寺の西に位置する城山公園内にあって、郷土の画家や風景画を中心に収蔵していた。その後、長野とゆかりの深い東山魁夷（1908-99）から作品と関係図書を寄贈されたことを受けて、1990

<sup>4</sup> 「プリマス上陸」および植民地の神話化の詳細な過程は金井を参照。

<sup>5</sup> 質疑応答では、ミュージアムの日本語の訳語が博物館と美術館に分けられている問題点も議論された。

年に東山魁夷館が併設して開館する。しかしながら、2017年に共に休館することになる。その後、県が公開プロポーザルを行い、3次に及び審査を経て建築家でプランツアソシエイツ代表の宮崎浩（1962-）が他の協働者とともに長野県立美術館を作り上げていく。そして、「旧美術館の約3倍の1万㎡」（宮崎 30）に拡大した美術館として2021年4月10日リニューアル・オープンした。

宮崎浩+プランツアソシエイツ編著の『つながる美術館—長野県立美術館 メイキング・ドキュメント』には、公開プロポーザルの段階から、構想を具体的なかたちにしていく様子を、設計段階、そして施工段階（工事現場での様子）まで、「ランドスケープ・ミュージアム」と「進化・成長する美術館」というプロポーザルで課せられた二つのお題を形にしていく様をつぶさに収めている。プロポーザルにおける「ランドスケープ・ミュージアム」という考えは、プロポーザルで委員長を務めた絵画出身の東京藝術大学名誉教授である竹内順一（1941-）の「善光寺に隣接した城山公園の立地条件を活かし、信州の山並みに呼応し、美しい景観となる『風景のような美術館』』という考え方に多くを負うものであり、ここでいう「ランドスケープ」は『景観』というよりも『風景画』に近い」そうである（30）。

宮崎はこれらのお題に対して「つながる美術館」という回答を提示し、それを協働者とともに検討・変更を重ねながらかたちにしていく。宮崎は、「ただ、そのようなさまざまな変更がある中でも、つねにはっきりしたことといえば、やはりいかに諸室をつなぐ『パブリックスペース』…を豊かな空間にしていくかという自分なりのこだわり」（38）だと言う。このねらいが細部にわたって工夫されていることが『つながる美術館』で明かされており、また、実際に行くことと体験できるので、ここでは本稿の「1. はじめに」で述べたように、共同体に人を引き入れ、その共同体を形成・変容させる主体としてエンパワーしようとする理念や奮闘を辿るという目的に従って、『つながる美術館』から二点だけ抜粋して紹介したい。

まずは「来館者はチケットをもたずに、展示室を除くすべての空間を自由に利用することができ、このフリースペースが、美術館の中でもそれなりに大きな面積を占め」ることである（98）。美術館の松本透館長は、美術館が城山公園や善光寺から地続きで、あたかも街を遊歩するように人を引き込み、経済的にも心理的にも人を排除することなしに自然に美術館に参加できるその仕掛けに驚嘆している。

専門家でないわれわれが図面を見て一番に目が行くのは屋上ですが、実際に現場が立ち上がってくると、目についたのが「立体遊歩道」とでも言いたくなる動線です。一般の人が自由に利用できる2階のレストランは善光寺を望む特等席ですし、屋上のテラスへも外階段を使って移動できます。屋上のテラスから、東の神社の側の道路へ出て、そこからカス

ケード脇の階段で二階や地上部分に降りることもできますし、回遊性に富んでいますね。

(98)

実際に、ランドスケープアートである中谷芙二子（1933- ）の「霧の彫刻」（「霧の彫刻 #47610 —Dynamic Earth Series—」2021）はチケットを購入することなしに体験することができる。「霧の彫刻」は本館と東山魁夷館をつなぐ「水辺テラス」に位置する「つながる美術館」のコンセプトにおいて象徴的な〈場〉であり作品でもある。「霧の彫刻」は水庭のある広場でそれとは知らずに思い思いの過ごし方をしている人たちをも、時間がくれば霧で包み込む。わたしたちが芸術作品に向かったときにするある種の構えをする隙を与えず、あたかも天候が変わるかのようによくよくと作品に巻き込んでいく。そこには、施しといった感じはもちろん押し付けがましきはみじんも感じられない。もちろん、象徴的な作品なので筆者のように「見どころ」として構えて行く人も多いだろう。しかしながら、筆者の力の入った構えは合気道の達人に出会ったようにするりとかわされて、「霧の彫刻」のもたらす変化にいつの間にか引き込まれた。人々が各々に行き交うかなり広いオープンスペースを、霧がずっと包むことによって、いつのまにか〈場〉が生まれ共有されていく。コンサート会場や祭りのような一体感とは違う。どこからともなくゆくりと霧のように微かに現れ、でも確かに感じられるその〈場〉を共有している感覚にとまどう。しかしすぐに最初のとまどいはただその〈場〉にいていいのだという脱力と愉悦へと変わった。

もう一点は、『つながる美術館』の Chapter 4 の章題「つかう 完成しない美術館へ」に顕著なように、人が参加することで長野県立美術館が補完され続けることがねらいとされていることである。言うなれば、〈場〉の「用の美」である。これは、先述したように、人が遊歩できるパブリックスペースが多いことと表裏一体である。（この美術館が、プロポーザルの二つのお題「ランドスケープ・ミュージアム」と「進化・成長する美術館」を両輪として、「つながる美術館」を推し進めていった、結果とも言える。）極端に言えば、人がそこにいなければ、長野のランドスケープに「あた



「霧の彫刻」（宮本撮影）

らしいつながり」を見つける人もいない。美術館がメンバーシップを問わず人を引き込み、その人々が長野という共同体に見出す「あたらしいつながり」を積み重ねることによって、共同体自体を熱量のある〈場〉に再構築・再解釈していく。少子高齢化・地方の人口減少が進む日本の状況を考えると、先に述べたチケット不要で遊歩できるパブリックスペースが多い点は、施しではなくむしろ積極的な戦略だということが見えてくる。

### 3. アメリカ・ニューヨーク編

#### 3.1 バーナード・マラマッドの「夏の読書」における公園と図書館

アメリカ・ニューヨーク編では、まずマラマッドの短編「夏の読書」における公園と図書館の表象を中心に、共同体からの疎外や所属といった問題を考えてみたい。東欧系や南欧系などの新移民たちがひしめくニューヨークの下町で、思春期特有の孤独さと閉塞感を抱える19歳の青年ジョージ・ストヨノヴィッチ (George Stoyonovich) に対して、いかに公園と図書館が「自分がその〈場〉に存在しているのだ」という感覚を彼に与え、また実際に共同体へのアクセスを可能にする〈場〉となっているのかを確認したい。

マラマッドはニューヨークのブルックリン生まれのユダヤ系アメリカ人二世で、両親は帝政ロシアのユダヤ人迫害から逃れてアメリカへ移民してきた。最も評価の高い短編集『魔法の樽』(The Magic Barrel, 1958) には13の短編が収められており、どれもユダヤ系移民や他の新移民たちが住む貧しいニューヨークの街(テキスト内で特定できない場合が多いが、ブルックリンやマンハッタンのロウアーイーストサイド、ブロンクスなど)が舞台である。また時代についても、「夏の読書」はおそらくマラマッドが20代を過ぎた大恐慌時代の1930年代が舞台だと思われる<sup>6</sup>。

あらすじを簡単に説明しておきたい。移民たちが集まって住んでいる貧しいニューヨークの街が舞台である。主人公のジョージはおそらくマラマッドと同様、ユダヤ系の青年であろう。彼は16歳で高校をドロップアウトしてから、職探しに出てもドロップアウトしたことを面接で聞かれることを恥じている。かといって復学もせず、その夏に働きに出ることもなかった。結

<sup>6</sup> デイヴィスは、精神的にマラマッドの弟ユージーンと「夏の読書」の主人公の青年ジョージが重ねられることを指摘している。「ユージーン・マラマッドの人生は兄の物語の異本であった。ほぼ初めからそうだった。バーニー [バーナード] は学校では成績が良かったが、ユージーンは兄が学校で成し遂げたレベルまでは到達できなかった。彼は教師に叱られ、兄と父が強く主張したためにエラスムス高校にかろうじて在籍した。のちに、大恐慌で気持ちが挫け、ユージーンは仕事を見つけに外へ行くことが『怖い』と言った。同時に、別の面では「普通の人間」としてまじな暮らしを求めるという理想の、怒りに満ちた擁護者として、政治意識が強くなった。だが、たいていは彼は一日家にとじこもっていた。継母が小言を言うと、彼は街角で失業中の友人とろろついて過ごした。それ以外は部屋にこもり、本を読むかラジオを聞くかであった。『夏の読書』にはある種の弱さが描かれているが、マラマッドがユージーンに捧げた短編集『魔法の樽』に収録されている」(136-37)。



局 “a five-room railroad flat above a butcher store” (Malamud)<sup>7</sup> (「肉屋の二階にある、五部屋から成るうなぎの寝床式アパート」) (柴田訳 99)<sup>8</sup> で、父と姉が早朝出勤した後、日中は家にこもり、カフェテリアで働く姉ソフィー (Sophie) が持ち帰るお客が置いていった雑誌や新聞を読んだりしながら無為に過ごしていた。夕食が済むとやっと外に出ていくのだが、蒸し暑い日には近所の住民たちが歩道に椅子を持ち出し、夕涼みをしているので少しきまづい。顔見知りです前から知り合いもいるのに、声を掛けてこない様子があえて描写されていることから、ジョージは生まれ育ちいまでも暮らしている共同体に疎外感を持っていることがわかる。

ジョージの疎外感とは彼の劣等感とその裏返しである承認欲求に強く結びついている。近所の人たちに感じる疎外感からは、「自分が何もしていないこと」をみんなが本当はわかっているが非難されるのではないかとこの恐れと防御の気持ちが感じられる。だから、公園に着くまでの近所の通りでは息苦しさを感ずてしまう。公園にたどり着くとジョージは孤独感や疎外感、劣等感からしばしのあいだ解放される。そして彼は、いつかこの界隈を抜け出して「より良い生活」(a better life)<sup>9</sup> を手に入れ、みんなに尊敬されることを夢想する。

In the evening after supper George left the house and wandered in the neighborhood. During the sultry days some of the storekeepers and their wives sat in chairs on the thick, broken sidewalks in front of their shops, fanning themselves, and George walked past them and the guys hanging out on the candy store corner. A couple of them he had known his whole life, but nobody recognized each other. He had no place special to go, but generally, saving it till the last, he left the neighborhood and walked for blocks till he came to a darkly lit little park with benches and trees and an iron railing, giving it a feeling of privacy. He sat on a bench here, watching the leafy trees and the flowers blooming on the inside of the railing, thinking of a better life for himself. He thought of the jobs he had had since he had quit school ... and he was dissatisfied with all of them. He felt he would someday like to have a good job and live in a private house with a porch, on a street with trees. He wanted to have some dough in his pocket to buy things with, and a girl to go with, so as not to be so lonely, especially on Saturday nights. He wanted people to like and respect him. (下線宮本)

夕食が済んだあと、家を出て近所をさまよった。蒸し暑い季節、商店のあるじやその女房が、店の前の歩道の厚いひび割れた敷石に椅子を出し、ぱたぱた自分を扇いでいた。

<sup>7</sup> “A Summer’s Reading” の原文は Kindle 版のため、以降の引用でもページ数を記さない。

<sup>8</sup> 訳はこれ以降、記載がない場合は柴田訳を引用。

<sup>9</sup> マラマッド作品では、無一文一つで移民してきた親たちが、子に対して自分たちよりも「より良い生活」を望むというモチーフがおなじみである。これについては後述する。

ジョージは彼らの前や、菓子屋の四つ角にたむろしている連中の前を通り過ぎた。生まれてからずっと知っている奴も少しはいたが、見てももうたがいに誰だかわからなくなっていた。これと行って行くところはなかったが、たいていは締めくくり近所を離れて、四つ角をいくつか越え、薄暗い明かりの灯る小さな公園まで行った。ベンチが置かれ、木が生えていて、鉄の手すりがひそやかな雰囲気をもたらしていた。彼はそこでベンチに座って、葉の茂る木々や、手すりの内側で咲いている花々を眺め、よりよい生活に思いをはせた。学校をやめて以来いままでやってきた仕事のことを考えた。…どの仕事にも満足できなかった。いつの日かいい職について、木々のある通りに面した、ポーチのある一軒家に住みたいと思った。ポケットにいろんなものを買える金が入っていて、デートできる女の子がいたら、と思った。そうしたら寂しい思いを、特に土曜の夜などに、しないで済む。みんなに好かれて敬意を持ってもらえたらとジョージは思った。(下線宮本 100-101)

人がひしめく近所の町で、内面化した他者の目から解放されて、ジョージに「誰でもない自由な瞬間」を与えてくれるのが公園である。しかしながら、この公園は家族を含めた共同体から束の間の逃避場所を与えてくれるものの、ジョージを共同体に引き入れ、共同体を再構築・再解釈する主体としてエンパワーする力は持たない。

ユダヤ系移民がアメリカのメインストリームの共同体のメンバーシップをいかに得るかというテーマは、先に触れた「より良い生活」というマラマッドにおなじみのモチーフを通して模索される。「より良い生活」をめぐる物語は常にアンビヴァレントさを残しつつ展開される。例えば、『魔法の樽』所収の「最初の7年」(“The First Seven Years,” 1950)に見られるように、マラマッドの作品では、特に体一つでアメリカに移民してきた親たちは、自分たちが耐え抜いてきた生活よりも「より良い生活」を子に送って欲しいと望む。だが、しばしば親は社会的・経済的・通俗的な意味での「より良い生活」を意図しているのに対して、子は精神的な意味での「より良い生活」を、とりわけ「読書」を通して「より良い生活」へ至ることを望む。(しばしば、父親ではない父親的人物の導きを受ける。)しかしながら、実のところ親の意に反した子の望む「より良い生活」とは、同時に、貧しさや苦しみに耐え実直に生きてきた親世代の生活の精神性を再解釈したものでもある。

この共同体を抜け出して「より良い生活」を手に入れるというジョージの空想のような欲求は、姉のソフィーやこのあと登場する主要人物ミスター・カタンザーラ (Mr. Cattanzara) (名前からしてイタリア系移民と思われる) たちの「読書」への信仰・信頼を通して、変容・具現化していく。

公園からの帰りにジョージは小さい頃から可愛がってくれた顔見知りのミスター・カタン

ザーラに出くわす。ミスター・カタンザーラから近況を訊かれたときに、ジョージは思わず、この夏は図書館でもらった 100 冊くらいの推薦図書のリストを読み進めていると言ってしまふ。話していく内に調子づいたジョージは、次のように続ける。

“I figure if I did that, ” … “it would help me in my education. I don’t mean the kind they give you in high school. I want to know different things than they learn there, if you know what I mean.”

「それだけ読んだら」…「教養がつくと思うんです。高校で教わるようなやつじゃなくて。何て言うか、学校で教えられるのとは違うことが知りたいんです。」(103)

ミスター・カタンザーラは感心し、ジョージを控えめに応援する。その日はそれで別れた。これ以降もジョージは変わらず日中の引きこもり生活と夜の散歩を続ける。一方で、ミスター・カタンザーラ経由で「読書」のことを聞いたと思われる近所の人々がジョージを呼び止めて褒めたり、声を直接かけないものの微笑みかけてくるようになる。ジョージも近所に居心地の良さを感じるようになる。父もソフィーも「読書」のうわさを耳にしているらしく、姉は優しく接してくれて、ジョージを誇らしく思ってくれる。しばらくは周りの人々からの賞賛の言葉や眼差しに承認欲求が満たされ、いい気分で数週間を過ごす。だが、実際には本を一冊も読まないまま時は過ぎていく。

次第にジョージは人々の尊敬や優しさを享受することに苦痛を覚え、人を避けるようになる。特にミスター・カタンザーラに出くわすのを恐れる。が、ある日とうとうミスター・カタンザーラに通りで出会って、一冊も読んでなかったことを彼に見透かされていたことが、はっきりとジョージに突きつけられる。そのやりとりの後、ジョージに最大の危機がやってくる。

George knew he looked passable on the outside, but inside he was crumbling apart.

Unable to reply, he shut his eyes, but when—years later—he opened, then he saw that Mr. Cattanzara had, out of pity, gone away, but in his ears he still heard the words, he had said when he left: “George, don’t do what I did.” (下線宮本)

外見はいちおうまともに見えるとわかっていたが、内側ではもうジョージはばらばらに崩れつつあった。

答えられずに、ジョージは目を閉じたが一何年も経ってから目を開けると、ミスター・カタンザーラは、憐れに思ってくれたのだろう、いなくなっていた。だがジョージの耳にはまだ、ミスター・カタンザーラが立ち去るときに言い残していった言葉が響いていた。「ジョージ、私と同じことをするなよ。」(下線宮本 108-109)

何事も先延ばしにしてきたジョージは、最も知られたいくなかった事実をミスター・カタンザーラに突きつけられることによって、自分が崩壊してしまう感覚を覚える。だがこの危機はジョージは変容させる機会となるのである。先の引用で、“—years later—”と挿入されていることから、ジョージが目をつぶり、そして目を開けるとミスター・カタンザーラが立ち去っていたという出来事は一回限りの単なる叙述ではなく、実際にジョージが時間を置いては何度もこの場面を反芻し、自己の崩壊と再生が伴う痛みを追体験しながら、自分と同じ轍は踏むなというミスター・カタンザーラの言葉を聞いているのだ<sup>10</sup>。

ジョージはその後一週間ほど引きこもったあと外に出て行き、近所の人がジョージがリストにある本を読み終えたことを褒めてくれることに驚く。そうしてミスター・カタンザーラが自分のことを真摯に思い、守ってくれたことを知る。そして秋になりジョージは図書館へ向かう。

One evening in the fall, George ran out of his house to the library, where he hadn't been in years. There were books all over the place, wherever he looked, and though he was struggling to control an inward trembling, he easily counted off a hundred, then sat down at a table to read.

秋のある晩、ジョージは家から駆け出て、もう何年も行っていなかった図書館に行った。そこら中、どっちを向いても本があった。内なる震えをどうにか抑えながら、彼はたやすく百冊を数え、それから机に座って、読みはじめた。(110)

心の震えは、内面化してきた言い訳と恐れを手放す覚悟からくるのかもしれない。ニューヨーク公共図書館の分館と思われる図書館は、高校をドロップアウトしたユダヤ系移民二世のジョージに対しても、本当は常に開かれていたのである。

小説はここで終わるが、タイトルの「夏の読書」と、実際に本を読み始めるのが秋だというずれや、さきほどの“—years later—”の挿入からも（すなわち、ジョージがミスター・カタンザーラの言葉を反芻して向き合うことができるように成長したのだとポジティブに解釈すれば）、ジョージが図書館という共同体へアクセスし、そこから諦めていた—あるいは想像もしなかった—人生を辿ったことが予兆されている。

---

<sup>10</sup> 下線の挿入をめぐる解釈は複数の訳を見ると分かれていることがわかる。本城訳では「とてつもなく長い時間が過ぎたような気がした」(294)、阿部訳は「何年もの月日が立ったように感じられたのだが」(267)と、時間の流れについて物理的な時間の流れより「比喩」であることに重きが置かれて解釈されている。それに対して柴田訳は実際の時の経過を強調している。ここで筆者は柴田訳と同様に物理的な時間の流れに重きを置き、「数年後に反芻している」と解釈する。

### 3.2 ニューヨーク公共図書館—共同体へ人を巻き込む

マラマッドの「夏の読書」の開かれた図書館の表象が、ワイズマン監督のドキュメンタリー『ニューヨーク公共図書館』を見ると、決してファンタジーではないことがわかる。むしろ、実在のニューヨーク公共図書館は想像以上に共同体に開かれており、さらに言えば、共同体という概念自体を開こうと奮闘を続けていることがわかる<sup>11</sup>。

まずは概要を見てみよう。ニューヨーク公共図書館といえばマンハッタンの5番街と42丁目の角にある2匹のライオンの像が目印の瀟洒な本館が有名である。しかし、実際には2021年3月時点でニューヨーク公共図書館 (New York Public Library) を中心にブルックリン公共図書館 (Brooklyn Public Library)、クイーンズ公共図書館 (Queens Borough Public Library) の3館で、ニューヨーク市5区 (マンハッタン区、ブロンクス区、スタッテンアイランド区、ブルックリン区、クイーンズ区) にわたり、217の分館、4つの研究図書館を管轄する巨大な複合体である。分館の中には生涯学習センターやティーンズ・センター、点字録音図書館 (the Andrew Heiskell Braille and Talking Book Library) なども含まれている。また研究図書館は、本館内にあり人文系を主に扱う the Stephen A. Schwarzman Building、ビジネス・ライブラリーの the Thomas Yoseloff Business Center at the Stavros Niarchos Foundation Library、アフリカ系アメリカ人の文化研究を支える the Schomburg Center for Research in Black Culture、リンカーン・センター内にあるパフォーマンス・アーツのための New York Public Library for the Performing Arts がある (Council 1)。

2021年ニューヨーク市議会発行の図書館の会計報告にある“Purpose and Function”を引いてみると、この図書館が多岐にわたる複合体ということがよりわかるだろう。

The libraries offer free and open access to books, periodicals, electronic resources and non-print materials. A number of public services such as reference & career services, internet access and educational, cultural & recreational programming for adults, young adults and children are also provided. The libraries' collections include 377 electronic databases and more than 65 million books, periodicals and other circulating and reference items. (Council 1)

各図書館では、書籍、定期刊行物、電子資料、紙媒体以外の資料を無料で自由にアクセスできるようにしています。また、レファレンス・就職支援サービス、インターネットへのアクセス、教育・文化・娯楽プログラムなど、大人・若者・子どもを対象とした多くの公共サービスも提供しています。図書館のコレクションには、377の電子データベースと6500

---

<sup>11</sup> ワイズマン監督のドキュメンタリーに先立つこと14年、2003年に出版された菅谷の『未来を作る図書館—ニューヨークからの報告—』にも、その成り立ちから、徹頭徹尾貫かれなおも更新され続ける「公共であろうとする姿勢」が、予算折衝など難題と併せて報告されている。

万冊以上の書籍、定期刊行物やその他の貸し出し・閲覧可能な資料が含まれています。(拙訳)

このようにニューヨーク公共図書館は、書籍に限定しないコレクションの収集を行う一方で、メンバーシップを問わず誰でもそのコレクションに無料でアクセスできるようになっている<sup>12</sup>。

ドキュメンタリーでも、資料の貸し出し・閲覧や作家や詩人、音楽家や研究者による文化的なイベントもちろん、求職や住宅などライフラインの確保、多言語・多文化を包括した整備など、ビジネスや暮らしに直結したサービスが熱心に行われている様子が映し出される。就職フェアでは警備員の仕事をアピールする講師の話や面接でのアピールの仕方を熱心に聞き入る人々が映し出される (00:28:54-00:35:30)。チャイナタウン近辺の分館では、グリーンカード取得方法の本や中国語のDVDの棚があり、“New Americans Corner”と銘打たれた特設コーナーでは本の表紙になっているアジア系の女性の顔が大きく映し出される (1:14:58-1:16:42)。障害を持つ人々へのサービスは点字資料や読み上げサービスの提供だけにとどまらず、住宅福祉サービスの利用を受ける難しさといった実情に触れつつ、住宅・医療・食料・介護で使用できるクーポンの説明を図書館のスタッフがやっている (1:16:42-1:22:10)。

とりわけ印象的だったのは、繰り返し行われるさまざまな段階・形態でのミーティングである。幹部レベルの会議から、本館・分館を含めた司書、スタッフ、ボランティア、そして場合によってはコミュニティのメンバーも加わったさまざまなミーティングが繰り返し映される。その白熱する議論の焦点は常に「すべての人を共同体に巻き込むために図書館ができることはなにか」ということだ。とりわけ、今日、インターネット環境を持たないことは深刻な情報格差を生み、サービスへのアクセスを阻害することにつながる。

象徴的なのは、幹部たちがITの技術発展から取り残された人々を救うべきだと話し合っている会議である。ある幹部が“this is the indicators from Seattle (...) ah (...) created a positive vision of what inclusive city could look like” (1:05:50-1:06:05) (「シアトルの各指標は、インクルーシブな都市がどのようなものでありうるのか前向きなビジョンを示しています」(拙訳<sup>13</sup>)) とシアトル市の書類を示しながら、そこでシアトルの図書館が大きな役割をしていることを話す。その上で、ニューヨーク公共図書館が、インターネット環境が家がない人にとっての地域のハブとなり、使い方を学ぶ場所となり、人々が交流する場を生み出す契機となりうることを語る。

<sup>12</sup> 2019年、実際に旅行者でありアメリカに住所を持たず英語もつたない70代の筆者の母は、42丁目のニューヨーク公共図書館で貸し出しカードを作成した。

<sup>13</sup> 『ニューヨーク公共図書館』の引用の翻訳はすべて拙訳。

...to develop series of indicators on and goals of inclusive New York would be.... We could provide a convenient space and help them unite with a bunch of the activities that would rationalize a bunch of the projects we are doing, and it would give us a way of continuing to shine light on those being behind. (下線宮本 1:06:39-1:07:03)

…そういった一連の指標、誰一人取り残さないニューヨークが目指す目標を展開するために。我々は使い勝手のいい空間を提供し、さまざまな活動を通して人々がつながるのを手助けすることができるはず。そうすることによって、われわれがいま行っている膨大なプロジェクトを合理化できると思うのです。また、そのことは取り残された人に光を当て続ける方法をわれわれに教えてくれるでしょう。(下線 宮本)

レベルは異なれど、同じ信念を持った議論と試みが重ねて映し出される。ある分館では、どんな工夫をすれば放課後に子どもたちが図書館に寄って数学に興味を持ってくれるかという議論から始まり、どうすれば図書館が究極的には子どもたちの居場所になれるのか話し合われている(2:00:11-2:05:43)。また、アフリカ系アメリカ人のコミュニティにある分館では、図書館のフロアにおいてカジュアルでオープンな会合が開かれる。そこでは図書館に直接的に関わる議題が話し合われるのではなく、長時間労働で子どもたちと一緒にいる時間がないこと、商品の卸値がアフリカ系アメリカ人のコミュニティに対して差別的な価格設定になっていること、また教科書の黒人奴隷の記述にいたるまで、暮らしやコミュニティの日常的な問題から始まり、教育や自分達の祖先がこの国に対して行った貢献と扱われ方の記述といった大きな問題まで話し合われる。図書館のサービスは固定的ではない。議題先行ではなく〈場〉を最初に提供することからすべてを始めているのがわかる。その会合の始まりには、参加者の女性が、通りかかった若者に声をかけたけど来なかったわ、といった雑談が交わされる。そして、オープンな場で話していれば図書館の利用者にも自分たちの話が聞こえるわよと言って、〈場〉を開くことを諦めない会話が交わされる(3:09:40-3:20:24)。

いかなる公共財であってもそこからアクセスを拒まれている人々や共同体を、図書館がどうやって可視化し、議論に引き込み、共同体に巻き込んでいくか、議論のシーンが繰り返し描かれる。いかに図書館がその障壁を取り除いていくか。このようにニューヨーク公共図書館の複合体の試みは、人々が共同体から取り残されないように、あるいは共同体が社会から取り残されないようにとの理念に貫かれている。それは人を巻き込み、ニューヨークという都市を活性化し続ける戦略でもあるのだ。ワイズマン監督の目はそこを透徹している。

だからこそ、誰一人取り残さないインクルーシブなく場〉を作り出すことの難題が、さりげなくとも決して目を瞑ることなく映されていることにとてつもない重さを感じる。財源獲得と

いう難題<sup>14</sup>と並んで、会議で触れられているのはホームレスの人たちの図書館利用の問題である。幹部たちの会議で「線引きの必要性」が議論される。葛藤を抱えているのかいつもより慎重な口調でみな発言する。答えが出る問題なのか。図書館が解決できる問題なのか。図書館がどこまでホームレス政策に踏み込むべきか。誰一人取り残さないということと「線引き」、あらゆる人々が共存する社会を目指すことがどれほど困難か思い知らされる。それらのある意味短期的な問いの立て方では到達できない目標であろう。だから、ある幹部は、一市民の感覚と断りながらホームレスとホームレスではない人が外では距離があるけれど図書館では距離をとれないことを指摘して、パブリックスペースであっても好まない他者と距離が近い場合には、人は他者を排除したがる傾向を暗に述べる。留保をつけつつも、彼はその傾向—あるいはもっと大きいものなのかもしれないが—を踏まえて、“In the end, we need to change a culture in this town”（究極的にはこの町の文化を変える必要がある）と述べる。話は市の政策との連携という粘り強い長期的な視点に切り替わって終わるが、トップの会議で突き抜けた共同体のヴィジョンが語られることにニューヨーク公共図書館の—そしてそれを透徹するワイズマンの—矜持が感じられる（2:20:00-2:22:19）。

### 3.3 ハイライン—廃墟のリノベーションと共同体の再構築・再解釈

最後に共同体の再構築・再解釈のもっとも新しい試みの一つである公園ハイラインに触れてアメリカ・ニューヨーク編を締めたい。ハイラインはもともと貨物列車の高架橋で、ニューヨーク・マンハッタンのロウアーウエストサイド（チェルシーからミートパッキング・ディストリクト）をハドソン川に沿って走っていた。1980年に完全に廃線になってから長いこと放置され廃墟となっていたが、2009年にリノベーションされ、縦長の公園ハイラインとして生まれ変わった。そして、ハイラインのプロジェクトは、風景や共同体を再構成・再解釈する世界の一大トレンドとなる。

1934年に正式に開通した高架線ハイラインは、1960年代頃に道路網の整備に伴い主たる貨物輸送手段がトラックに取って替わられる。1980年に最後の列車がハイラインを走ってから、1990年代終わりまで高架橋はそのまま放置されることとなる（ディヴィッド、ハモンド 4-7）。ハイライン周辺は高架橋のせいで暗く、特にミートパッキング・ディストリクトはその頃まで

---

<sup>14</sup> 成り立ちからニューヨーク公共図書館が「公立」や「市立」ではないことはワイズマンのドキュメンタリーや菅谷を参照。財源については先述の市議会の報告によれば、市の予算から59%、その他はニューヨーク州や連邦政府からの予算、民間からの寄付、エンダウメント投資と収益から賄われている。成り立ちや財源の内訳を見れば、この図書館が「市立」ではなく、「公共」と銘打たれている理由がわかるだろう。ただ、同報告書によれば、パンデミックの影響によりエンダウメント投資以外のすべての財源が減少している（Council 2）。



治安の悪い地域として有名であった<sup>15</sup>。

ニューヨーク市当局と地主たちの要望から、ハイラインは高架橋を取り壊し更地にしてから再開発されることが既定路線であった。が、1999年に地区住民評議会に参加した地域住民のジョシュア・ディヴィッド（Joshua David）とロバート・ハモンド（Robert Hammond）は高架橋の構造に惚れ込み、同年にフレンズ・オブ・ハイライン



"The High Line in Manhattan, New York City at West 20<sup>th</sup> Street, looking downtown (south), " Taken by Beyond My ken on 5 July 2010. Creative Commons

（Friends of the High Line）を共同設立する。フレンズ・オブ・ハイラインは、メディアを活用し人々の耳目を集めたり、地域で基金集めのパーティをしたりして、高架橋をリノベーションした公園を作るという案に人々を巻き込んでいった。結果、ディヴィッドとハモンドらの案が採用され、ハイラインは建築家や公園土木の専門家でもない地域住民主導という例をみない都市開発プロジェクトとなった（Littke, Locke & Haas 353-55）。

また、高架橋を利用した公園という発想は、アメリカを含め世界の一大トレンドとなった。イスラエル・エルサレムのトレイン・トラック公園（the Train Track Park）は、富裕層と貧困層の共同体を結ぶ役割を果たすようになる。またロンドンには、オックスフォード・ストリートの地下道をリノベーションしたキノコ園が作られた。他にもメキシコシティ、フィラデルフィア、シカゴで高架橋を再構成・再解釈した公園が作られている（Littke, Locke & Haas 355-56）。

ハイラインは、元オレオの工場をリノベーションして 1997 年にオープンした切尔西・マーケットという巨大な屋内商業施設に隣接し、買い物や食を楽しむこともできるが、誰でも街からふらっと入り込みただぶらぶらと歩くだけでもその〈場〉にただいる悦楽を感じることができる。足元にはところどころ線路跡が剥き出しになっており、共同体が積み重ねてきた時間も感じることができる。また、おそらく計算され尽くされて植栽されている花やハーブの庭は、どこか廃墟の中で人工物の衰退・消滅と反比例して再生し続ける自然を思わせる無造作な

<sup>15</sup> かつて精肉処理工場や倉庫が多く集まっていたミートパッキング・ディストリクトは、東京芝浦の倉庫街がディスコやクラブに変わり若者を惹きつけたように、2000年代には完全にブティックやナイトクラブなどが立ち並ぶエリアとなっていた。但し、そうであるがゆえに人をジャッジし選別するような排他性を伴っていた。

生命力があり、無骨かつエレガントという廃墟であった高架線のモダンな再解釈を象徴するものとして見事である。

ハイラインの植栽は、アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) の “The End of Something” (1925) の冒頭を思い出さずにはいられない。この短編は自伝的色合いの濃い *Nick Adams Stories* の一編であり、この物語群のテーマである「死と再生」が強く表れている。冒頭では、製材の町だったホートンズ・ベイの製材所が閉鎖され、次々に物が運び出され建物だけが残されている様子が描かれている。その 10 年後、廃墟となった製材所跡地を通して釣りにやってきた主人公ニックと恋人のマージョリーの足下には、廃墟のなかで再生の芽吹きを感じさせる湿地の草むらがある。

Ten years later there was nothing of the mill left except the broken white limestone of its foundations showing through the swampy second growth as Nick and Marjorie rowed along the shore.” (下線宮本 200)

10年後、製材所の跡は何もなくなり、ただ湿地に生え直した草むらのあいだから、白い石灰石の基礎が壊れて見えているところへ、ニックとマージョリーが岸沿いにボートでやってきた。(下線宮本 211-12)

製材の町の荒廃は、ニックのマージョリーへのかつての気持ちが失われてしまっていることの予兆になっている一方で、「何かの終わり」の背景には常に変わらぬ自然が描写されている。この圧倒的な生命力を持つ自然にもたれかかりながら読者は荒廃のなかに「再生」を見出す一方で、そのような自然と対比されることによって、あらゆる人工物は時間とともに朽ちていくことが不可避であり、「死」を強烈に意識してしまうのである。また、自然のなかで再生する力を得た人工物はやがて時とともに荒廃し、一方で自然はまた再生する。そのような時間への負けを運命づけられた人間は、それでも荒廃と再生の中にある自然に寄りかかることによって、自分たちが「死と再生」という連綿と続く壮大な時間の一部であり、人類—あるいは生命体—という究極的な共同体の一部であることを感じることに、ただ存在していることへの勇気を得るのかもしれない。わたしたちがハイラインに惹かれるのは、そのような人工物と自然の物語が書き込まれているからだろうか。

そんな壮大な妄想はさておき、植栽の中に身を置きハドソン川やマンハッタン街の街並みを眺めていると、「ただそこにいること」の愉悅を感じることができる。この地域が、かつて治安が悪く、地域住民も旅行者も容易に近寄れなかった寂れた共同体であった事を考えると、とりわけ人々が参加することで補完され、未完のままずっと成長し続ける共同体のあり方の一つの理

想が見えてくる。

#### 4. 最後に

本稿では、ここまでややアクロバティックではあるが、さまざまなく場や物語を並置させることによって、公共財やインフラへのアクセスに対する障壁をユニークな形で取り除き、共同体のメンバーシップを押し上げることが、共同体にとっても人にとってもエンパワーメントになるケースを検討してきた。障壁を取り除き共同体に人をいつのまにか引き入れること。そのことは福祉的な側面だけでは捉えきれるものではない。人がそこに参加してこそ活性化し、補完され続ける〈場〉の「用の美」が、共同体の再構成・再解釈に力を与えているのである。そのことは、本研究調査旅行のテーマである「記憶の断絶と継承およびその記述をめぐる問題」に一つの回答を与えるものであった。

#### 引用文献

- Bernard Malamud. “A Summer’s Reading.” *The Magic Barrel*. Farrar, Straus and Giroux, 2011. Kindle.
- Council of the City of New York. “Report of the Finance Division on the Fiscal 2022 Preliminary Plan and the Fiscal 2021 Preliminary Mayor’s Management Report for the Libraries.” March 9, 2021. <chrome-extension://efaidnbnmnibpcajpcglefndmkaj/https://council.nyc.gov/budget/wp-content/uploads/sites/54/2021/03/035-039-Libraries.pdf>. 2022年5月16日取得.
- Ernest Hemingway. “The End of Something.” *The Nick Adams Stories*. Scribner, 1981. pp. 200-204.
- Littke, Hélène, Ryan Locke and Tigran Haas. “Taking the High Line: Elevated Parks, Transforming Neighbourhoods, and the Ever-changing Relationship Between the Urban and Nature.” *Journal of Urbanism: International Research on Placemaking and Urban Sustainability*. vol. 9, no. 4, 2015. doi: 10.1080/17549175.2015.1063532. pp. 353-71.
- 『アメリカ・魂のふるさと〜アメリカの歴史と真実〜』第1巻、ケンメディア、2006年。DVD
- ARIKU「老松場古墳群」『関西大学文学部考古学研究室』2021年3月2日、[wps.itc.kansai-u.ac.jp/ariku/2021/03/49/?doing\\_wp\\_cron=1652689091.1295349597930908203125](wps.itc.kansai-u.ac.jp/ariku/2021/03/49/?doing_wp_cron=1652689091.1295349597930908203125). 2022年5月16日取得.
- Wikipedia「木枯し紋次郎」2022年2月27日、<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%A8%E6%9E%AF%E3%81%97%E7%B4%8B%E6%AC%A1%E9%83%8E>. 2022年5月16日取得.
- 「木枯し紋次郎（第1期）」*allcinema*、2019年。www.allcinema.net/cinema/159594. 2022年5月16日取得.
- 金井光太郎「国民国家アメリカの創造とプリマスの記憶の神話化」『Quadrante: クアドランテ[四

- 分儀]「地域・文化・位置のための総合文化誌』no. 19、2017年、doi: 10.15026/89130. pp. 103-15. 2022年5月23日取得.
- 笹沢左保「赦免花は散った」『木枯し紋次郎(一)～赦免花は散った～』光文社、2004年、Kindle.
- 一、「流れ舟は帰らず」『木枯し紋次郎(一)～赦免花は散った～』光文社、2004年、Kindle.
- 一、「水神祭に死を呼んだ」『木枯し紋次郎(一)～赦免花は散った～』光文社、2004年、Kindle.
- 島津京「美術館のコレクションと建築—長野県立美術館を中心に」専修大学人文科学研究so第5回定例研究会、2021年10月5日、於：オンライン.
- 菅谷明子『未来を作る図書館—ニューヨークからの報告—』岩波新書、2013年.
- デイヴィス、フィリップ『ある作家の生—バーナード・マラマッド伝』勝井信子訳、英宝社、2015年.
- デイヴィッド、ジョシュア、ロバート・ハモンド『HIGH LINE—アート、市民、ボランティアが立ち上がるニューヨーク流都市再生の物語』和田美樹訳、アメリカンブック&シネマ、2013年.
- ヘミングウェイ、アーネスト「何かの終わり」平石貴樹編訳『アメリカ短編小説ベスト10』松柏社. pp. 209-18.
- 藤野泰造「国定忠治」『日本大百科全書(ニッポニカ)』*JapanKnowledge*. [japanknowledge.com](http://japanknowledge.com). 2022年5月23日取得.
- マラマッド、バーナード. 阿部公彦訳「夏の読書」『魔法の樽 他十二篇』岩波文庫、2013年. pp. 243-59.
- 一. 柴田元幸訳「夏の読書」『喋る馬』スイッチ・パブリッシング、2009年. pp. 97-110.
- 一. 「夏の読書」本城誠二訳・解説、『しみじみ読むアメリカ文学』平石貴樹編、松柏社、2007年. pp. 283-98.
- ミモザフィルム編『ニューヨーク公共図書館—エクス・リブリス』ミモザフィルムズ、ムヴィオラ、2019年.
- 宮崎浩+プランツアソシエイツ編著『つながる美術館—長野県立美術館メイキング・ドキュメント』彰国社、2021年.
- ワイズマン、フレデリック監督『ニューヨーク公共図書館—エクス・リブリス』ポニーキャニオン、2020年. Blu-ray.